

〔新刊紹介〕

瀧本和成編著

『京都 歴史・物語のある風景』

池田 彩音

京都は古都として親しまれ、今もなお多くの人々を魅了し続けている。本書は、歴史学・文学・地理学をそれぞれ専門とする三名の著者によって、あらゆるテーマから「京都」が論じられ、その特質と魅力に迫るものである。

「Ⅰ 寺社をめぐる歴史・物語」では、延暦寺、祇園社、北野天満宮など、寺社をめぐる人や歴史に焦点が当てられ、京都文化への影響などが掘り下げられていく。中でも、洛西の禪寺の歴史をたどり、室町幕府の樹立が「京都らしい」風景を作り出したといったことを提示する第二節は、「京都」のイメージ形成について重要な視点を与えてくれる。「京都らしさ」とは何か、一度立ち止まって考える契機となるだろう。

「Ⅱ 川・橋・道をめぐる歴史・物語」では、森鷗外、夏目漱石といった日本近代

文学を代表する作家が多く取り上げられている。作家と京都の関わりに触れつつ、その作品の背景を追究する。そうしたアプローチにより、「京都」という場に感化された作家たちの姿と、その作家たちによって捉えられた「京都」像が浮かび上がっている。

「Ⅲ 街をめぐる歴史・物語」では、花街という面から「京都」に切り込む論が興味深い。花街としての西陣や、鳥原の太夫道中など、かつての風景が様々な資料から照射されている。また、京都人が語る「京都」を、参考文献を挙げながら紹介する第六節は、読者の知的好奇心をかき立てるものである。

「Ⅳ 喫茶・料理・茶屋をめぐる歴史・物語」では、茶・酒・京菓子といった京都をめぐる飲食物、カフェー・料理屋といっ

た食を供する空間に関するテーマが掲げられる。特に茶、酒、菓子の歴史については、様々な資料が挙げられており、詳細である。加えて、「茶屋」をめぐる高浜虚子や夏目漱石の交流についても、人々の回顧録によって鮮明に示されている。

ほとんどの節の末尾には、「京のこぼれ話」と題されたコラムが添えられ、各テーマをより味わい深いものとしている。ここから興味を持ち始める事柄も、少なくないであろう。

本書は、たんに一つの地域としての京都を語るにとどまらない。文化・芸術空間としての「京都」を軸に据えることで、各学問領域によるアプローチから何が見えてくるか、そうした学問の可能性をも提起する、優れた一書である。

（嵯峨野書院、一六七頁、二〇一五年八月、本体価格二三〇〇円）

（いけだ・あやね 本学大学院博士後期課程）